オセ　一寸其許の手を（とデスの手を取りて）此の脂ぎったみづ〳〵しさ

デス　ぢやと申して、まだ年端も行かぬ身の、憂世の憂さも知らぬ手てムります

オセ　是ぞ其許が多情の證、この水々しく温かい事よなう、ハテ此手は少々氣隨氣儘を慎んで、祈禱斷食、難行苦行を致させいては――此手の中にこそ、思はぬ道に其許を誘ふ、多淫の妖魔が潜むで居るぞよ、實に好い手ぢや情深い手ではある

デス　實にさう仰有れば其通りでもムりませう、妾の愛情を貴郎に捧げたも、コレ此手でムります

オセ　げに情深い手ではある、心を籠めて手に手を取りしは昔の緣組、今は手と手ばかりて心は空

デス　そのやうな御話は存じませぬ、それはさうと御約束は

オセ　約束とはそりや何の

デス　只今貴郎と御話を致すやうにと、カッシオを呼びに遣しましてムりますが

オセ　拙者は眼が痛んで涙が出る、其許の手巾を貸して呉りやれ

デス　そんなら此品を

オセ　それてはない、拙者がいつぞや贈りし品を

デス　それは茲に持合せませぬ

オセ　何ぢや持合はせぬ

デス　眞實てムります

オセ　とは不覺ぢや、デスデモナ、彼の手巾は誰あらう、我亡父が、さる埃及

の婦人より乞ひ得し品、其婦人こそは人の心を讀み得し巫女、我母彼の手巾を所持せる間は、我父なる人の愛を惹き、母が情のまに〳〵、父の心を和らげ得むも、一旦之を失ふか、さなくば他人に與へなば、我父の目は忽ち我母を厭はしきものに見下して、心密かに他の增花を思ふに至るべしと告げしとやら、さて我母臨終の際そを拙者に讓り、他日妻を迎へなば、妻なる女に贈れよとの御遺言、さてこそ其許に贈りしなれば、隨分大切に秘藏せい、彼品を失すか、但しは又他人に與へなど致さうなら、それこそ其許が一身の破滅ぢやぞや

デス　其樣な事がムりませうや

オセ　實にや其織目の中に、魔術の印が結んである、世に二百歲の刼を經たる梓巫子の、龜トの表に激され、聖められたる蠶の虫の、吐きつる糸にて繡箔し、熟練家が潰けし處女子の心臟の才乃伊にひたして集めたるもの

デス　アノそれは眞實で

オセ　紛れもない眞實の事ぢや、ぢやに依てよく〳〵大切に致すがよい

デス　そんなら寧そ、初めから其樣な品などは

オセ　ヤイ〳〵〳〵、何故汝は左樣なことを

デス　ハテ、マア、其樣な恐ろしい御聲を遊ばして

オセ　失つたか、なくなつたか、取還しもつかぬか、コレ、どうぢや

デス　神よ御慈悲を——

オセ　サア何と

デス　彼品は失しは致しませぬ、乍去若し失した其時は——

オセ　何と

スデ　決して失しは致しませぬわいな

オセ　然らばこゝに持つて參つて見せるがよい

デス　それは容易い事てムりますが、只今は厭てムります、其樣なことを仰有て、妾の御願を外になさらう御目算、御願てムります、どうぞカッシオを再び御召還し遊ばしませ

オセ　手巾をこゝへ持參致せ、心に懸かる事があるわ

デス　ハテおよしなされませ、あの樣な副官が又とムりませうや

オセ　手巾引

デス　どうぞカッシオの御相談を

オセ　手巾引

デス　從來とても、たゞ〳〵貴郎の御情故立身出世も致した男、貴郎と共に冒した危險も幾そ度

オセ　手巾引

デス　そりや餘りてムりますぞい

オセ　えゝ出てうせい

とオセロ退場

エミ　これでも御悋氣はないと仰有りますか

デス　從來は遂ぞ此樣な事もなかったが、さては眞實彼手巾に不思議があると見える、それを失すとは運の盡き

エミ　一年二年で男の正躰は判らぬもの――男は胃臟女は食物、食ふ時は飽くまて食ひ、飽けば、吐出すが胃臟の習ひとムります、――アレ御

覽じませ、カッシオ殿とイアゴーとで

カッシオ及びイアゴー登場

イア　他に致し方もない、是は是非夫人の御盡力に依るより外は仏ります

すまい、いや是は幸ひ、早う往て御願ひなさるがよい

デス　これは〳〵カッシオ様、アノ何ぞ變った事でも

カッ　又々例の御情願でムります、何卒夫人の御情深い御取成にて、某が

一心不亂に尊敬致す、大將殿の御愛顧を恢復す事の叶ひますやう、偏

に願上まする、最早某は、此上御待申す事が出來ませぬ、若し某が罪科

重くして、過去の忠義も、現在の悲嘆も、さては心に誓った將來の精勤

も、御愛憐を購ふに足らずとならば、縱しそれとても、少しも、早う結局

を知るが某の身の爲でムります、愈よ左樣な身の上と定まらば、強ひ

ても泣寢入りに、他の渡世に浮身を窶し、運命の弄るがまゝに任すば

かりでムります

デス　あゝコレ、カッシオ様、御詫も今は折が惡い、大將殿は故の大將殿で

はムりませぬ、あの御心の變つたやうに、御樣子がお變りなされたな

ら、お見それ申す程であらう、妾が精一杯の御嘆願故、詞が過ぎると大

將殿のきつい御不興、も少し御辛抱なされませ、及ぶだけは致します、

自分の爲めなら出來ぬ程も致しませう程に、差當りどうぞそれで御

滿足を

イア　大將には御立腹なされましたか

エミ　たった今此處から御出なされましたが、常にない、穩ならぬ御樣子で

あつたわいな

イア　我君にして御立腹遊ばすとは――某は眼前戰場にて敵の大砲が御手兵の幾列を、空中に吹上げたりし其時に、彈丸は宛ら魔物の如く、我君の御側なる御兄人を一吹に吹倒しゝを見ましたが、大將殿には、其時の顏色常の通り、左樣な御方が御立腹あらう筈はムらぬに、こりや何ぞ重大な事件でも――すりや早速伺候致さねばならぬ、彼君が御立腹あるからには、一大事があると見える

デス　どうぞさうしてたもれい喃

とイアゴー退場

國事に關る一大事の、通知がエニスから屆いたか、但しはこゝサイプラスで、未發の椿事が露顯せしか、其樣な事で、御心が亂れたものであらう、男の常でかやうな折には、心は大事にありながら、目下の者に八當り、お互に指一本痛うても、五躰中がすぐれぬものゞして男ぢやとて神ではなし、花聟になりたての、其優しさを常も望むは無理であろ――ほんに妾とした事が、喃エミリア、妾は今の今迄も、大將殿の不親切を、心で責めて居たなれど、かう思へば無實の罪であったわい喃

エミ　仰の通り、國事のお爲めばっかりて、夫人に關はる事や、法界悋氣のお爲めでは、アノ、ないやうに致したうムります

デス　何のいな、お悋氣を受けるやうな、覺えは此身にさら〳〵ない

エミ　覺えがないとて、男の悋氣は止まぬもの、悋氣深い故に悋氣もします、原因有て悋氣するのではムりませぬ、悋氣と申すは、我から我を產み、自分で自分を造る、不思議の怪物でムります

デス　何卒そのやうな怪物を、オセロ殿の御心の中に、間違つても入れた

うない

エミ　ほんに左樣でムります

デス　妾もこれから、一寸御目に懸かって來やう――カッシオ樣、暫らく此處らに御待ちなされ、折善くば大將殿に申し上げ、精一杯御許容あるやうに願ひませう

カッ　忝けなうムります

とデスデモナ、エミリア退場

ピアンカ（カッシオが情婦）登場

ピア　これ申しカッシオ樣

カッ　何用あって其許は此處へ、コレ、いとしのピアンカ、如何致した、實は身共も、そもじの許へ、折角行かうと思つた所

ピア　妾とても丁度貴郎の御宿處へ、參らうと存じた所、どうした事やら、最早一週間も御來臨がない、ほんに此七日七夜、時に積れば百六十幾時といふ、其間の待詫しさ、戀する者の胸の時計は、一日が千日、それは辛うござんしたわいなア

カッ　許して呉れピアンカ、此中は甚う心に懸かる事が有って、心ならぬ無音も致したが、何れ近い中に、此埋合は屹度するぞい――さてピアンカ其許に頼む事がある、此模樣を取て呉りやれ

とデスデモナの手巾を交付す

ピア　カッシオ樣、是は何處から御手に入りました、外の女からの御音物、さてこそ此中、御來臨のなかった其譯も――えゝ此樣事にならうとは、口惜しい

カッ　こりや女、何處の惡魔に、其樣な邪推を敎はったか、棄てゝ了へ、還して了へ、此手巾が、仇し女の紀念物ぢやと疑ふか、そんなものでは、さらさらない——

ピア　そんなら誰のでござんすぞへ

カッ　それは知らぬが、身共の居室に落て居た、落し主の現れぬ中、どうぞ模樣を模て置きたい——いさくさ云はず、其樣にしてたもれ、そして今はこれで往んで呉りやれ

ピア　往んで呉りやれ、そりやまた何故に

カッ　こゝは大將殿の御供前、女を伴て居る所を、御目にかけるは不面目、又好もしい事でもない

ピア　その又仔細は

カッ　其許憎い故てはない

ピア　たゞ可愛くないばッかり——そんならどうぞ少の間、還路を送つて下さりませ、そして今夜は早々と往て遣ると、仰有つて下さりませ

カッ　そんなら送つて行くのは、ちッとの間ぢやぞや、其代り今夜は早々と出懸けやう

ピア　宜うござんす、時と場合て仕方がない

と二人退場

第四幕

第一場――サイプラス　城門前

オセロ、イアゴー登場

イア　左様に御考へなされまずか

オセ　左様に考へるとは

イア　パテ、内證の接吻を

オセ　そは許し難き猥らな接吻

イア　然らば一時計りが間、猥らな意は少ともなけれど、同一衾に帶紐解いて寢た時には

オセ　同衾して、それて猥らな意がない、それぞ外道の僞善といふもの、縱

ひ淫猥の念なくして、左様な事を致すにせよ、天意を冒す無道の擧動、遂には魔道に墮つるてあらう

イア　でもムりませうが、眞實無垢てあるならば、罪宥すべきてムりませう、乍去、若し某が、女房に手巾を與へるなら――

オセ　さて其時は

イア　申すまてもなく、それは最早女房の有、何處の何樣な男に贈らうと、それは隨意てムりませう

オセ　乍去女には又守るべき名聞と申すがある、それをまて、他人に與へて宜からうや

イア　其名聞と申すは目にも見えず、手にも取られず、所有てぬ筈の者が、動もすれば所有ちます物、乍去手巾なら――

オセ　おゝ、それよ、折角忘れて居たものを、汝の言葉で――凶事を報せて啼く鴉が、疾病ある家の棟に栖つた様に、その厭はしき想出が、此胸の中に浮びしぞや――えゝ拙者が手巾をカッシオ奴が

カッ　してそれが何致しました

オセ　今はそれを云ふも厭ぢやわ

イア　然らば彼が不義の現場を某が見屆けたなどゝ申したなら、又は思ふ女を口説落すか、先方から懸想されて、戀の出來た時などは、えて行く先々で、惚話吹聽は、冶郎の常でムりますが、其様に彼のカッシオが惚ける所を、此某が立聞したなどゝ申したなら、ハテ何となされまする

オセ　彼奴が何ぞ申したか

イア　申しましてムりますが、カッシオをお糺しなさらば彼方にも逃口上はムりませう

オセ　さて何と申した

イア　かういふ事を致したと――いや某は矢張り――

オセ　何、何と

イア　寢た事が――

オセ　デスデモナと

イア　そこは何とても、宜い様にお解釋き下さりませ

オセ　ちえー彼女と、奇怪千萬、手巾の一條もあり、又た此の自白――おゝ自白か、あゝ想へば肌に粟、此様に我胸の騷ぎ狂ふは、確かに事實のあ

る證據、我五躰をして、かく震ひ頓からしむるは、實もない讒謗のみではあるまい――おゝ二人が鼻と鼻、耳と耳、口と口――左樣な事が――何、自白ぢや――手巾ぢや――えゝ惡魔が

とオセロ憤激の餘り氣絕する

イア　廻れ〳〵、乃公が注ぎ込んだ毒が廻れ〳〵、馬鹿正直な奴原は、みんなかうして罠に懸ける、賢女とやら、貞女とやらも此通り、見ん事濕衣は着せて遣る――（オセロの耳元へ口を寄せ）如何なされました、閣下、コレサ閣下、オセロ殿。

カッシオ登場

カッ　これ〳〵カッシオ殿

カッ　何事ぢやな

イア　大將殿が、癲癇を起されて此通り、これが丁度二度目てムるが、昨日も卒倒なされました

カッ　御頭を採んで進ぜるがよい

イア　いや却て、此儘が宜しうムる、御病勢に逆はぬやうに、そっとしてお置き申さぬと、御口端から泡を吹き、遂には狂氣のやうにおなりなされる――お覽あれ、お動きなさる、貴殿には暫らく彼方へ〳〵、直ぐにお氣がつかれます、そして大將がお歸館なされたなら、後て貴殿に御話し致したい、重大な事件がムります

とカッシオ退場

オセ　如何なされました閣下、御頭が御痛みなされましたか

オセ　何、拙者を嘲弄致すか（要なし夫は、頭に角を生ずとの傳說あるよ、イアゴーが詞に、頭が痛むかとの問は、角の生ず

るが爲めに、閣下の頭は痛むならむとの意味に取られ、さてこそオセロは怒りて此語ありしなり）

イア　閣下を嘲弄――けしからぬ、左樣な事は――何卒大丈夫らしう、御不運を御忍び遊ばされませ

オセ　頭に角の生えた此身は、既や畜生ぢや、怪物ぢや、大丈夫などゝは思ひも寄らぬ

イア　果して然らば、人數多き都會の中には、數多の畜生や、然つべらしい怪物がムります

オセ　ハテ、カッシオは眞實自白致せしか

イア　男らしうなされませ閣下、妻を有つ男と申すは、みんな御同樣てムります、汚れた臥床を我專有とのみ安心して、夜な〳〵快眠を貪る夫は、幾何あることてムりませう、それに比ぶれば閣下なんどは、宜い方てムります、おゝ安心したる閨の中て、不義女の口を吸ひ、通れ貞女と思ひ居るとは何たる惡魔の戲れ事、いや某などは、知らぬが佛は大嫌ひ、知ったからには腹のゐるやうに致しまする

オセ　それがよい〳〵、さもあらう筈

イア　只今閣下が、御人柄にも御不似合な御愁傷て、前後不覺に御なりなされました時、丁度カッシオが參りし故、宜い加減に云ひくるめて還しましたが、後刻又出直すやうに、話柄があると申しをを、承知致して立去りました、追つけ來る事てムりませうが、閣下には暫く彼方へお退きなされ、御辛抱有て會談の摸樣を、御立聞きなされませ、又もや得意の惚話を語らせ、何處て、何うして、何時の頃から、幾度程、又此次は如何にしてなんど、夫人と逢引の寸法を吐かせます、其時の彼が顏ばせ

に御目留められ、眼つき、口つき、一顰一笑の末迄を御吟味なされませ、たゞ努々勘忍といふ事を御忘れなさやう、若し御忘れなされたなら、乍恐閣下は、憤怒の一塊肉、大丈夫とは申されませぬ

オセ　勘忍にぬかりはないが、これ聞け、拙者は、他く迄――殘忍ぢやぞや（姦婦姦夫を容赦はせじとの意）

イア　それは萬々御尤――たゞ遽てずに、悠々となされませ、先づ〳〵何卒彼方へ〳〵

（オセロ片隅へ退く）

かう欺瞞して置いて、さてカッシオには、ビアンカの噂を持懸ける、情を賣つて、衣食を求むる賣女の、常、多勢を騙して、一人に騙さるゝ、掟に漏れず、彼奴カッシオに首ッ丈、カッシオとても、彼奴の噂を聞く時は、喜び笑ひが制まるまい――おゝ噂の主が參る樣子

（カッシオ再登場）

カッシオが笑へば、オセロが狂ふ、嫉妬の眼で見る時は、彼が笑顔は云はずもあれ、身振素振の末までが、とんだ意味に取れるであらう――これは〳〵副官殿

カッ　副官の役名を聞くにつけ、身を截斷らるゝ思ひが致す

イア　デスデモナ樣に御頼みなされば、御安心なものでムります、乍去これがビアンカ殿への御依頼ならば、どんなにか、早う埒が明くのでムらうに

カッ　いやはや困り女で

オセ　（傍語）最早相好を崩して居る

イア　彼の樣に情夫を慕ふ女は、遂ぞ從來見た事もない

カツ　いやナニ、とんだお轉婆女ぢやが、某には眞實心中を立て居る樣子

オセ　（獨語）口て貶して、笑顏て紛らす不屆者

イア　時にカツシオ殿

オセ　（獨語）そろ〳〵惚話を引出さうと致して居る、出來し居るわい

イア　愈よ御婚儀を擧げるとか、ビアンカ殿の御話てムりますが、全く左樣て

カツ　ハハア〳〵

オセ　（獨語）其笑ひは勝閑か、此の色道の剛の者奴が

カツ　某が彼女と婚儀を擧げる、何ぢや彼女は賣女風情、某が心を、其樣に見縊つたものでもない、それ程墮落も致さぬに、ハハア〳〵

オセ　（獨語）さうぢや〳〵、勝者は屹度笑ふが常

イア　乍去世間ては、御婚儀の噂が專てムります

カツ　宜い加減の事は云はぬもの

イア　虛言を云つたら、某の顏は立ちませぬ

オセ　（獨語）拙者の顏に泥を塗つた不所存者めが

カツ　其噂は皆な彼の猿めが、自分て吹聽したのてあらう、己が己惚心からの獨り極、某が約束致した譯ではない

オセ　（獨語）イアゴーが、あの目くばせは、逢引の一伍一什をこれから語るとの意味てあらう

カツ　遂先刻も此處へ尋ねて參つたが、行く先々を、尾け廻はされるには困却々々、先日もヱニスのさる人々と、海岸にて會談致し居る中、突然參

つて、襟頸へしなだれかゝり――

オセ　（獨語）おゝいとしのカッシオ様と叫んだか――彼奴の様子で察せらるゝ

カッ　釣下るやうに凭れ込み、泣いたり、突いたり、引張つたり、いやはやそれは――ハッハッハッ

オセ　（獨語）それからとう〳〵、拙者の室へ引張り込まれた物語か――えゝ汝の鼻を引きちぎって、投げて呉れう狗の、其處らに居ぬが殘念だわい

カッ　いや、どうしても、手を切らねば埒が明かぬ

イア　南無三、噂の主が見えました

カッ　さて〳〵麝香猫のやうな奴、五躰中を香はせて――

ピアンカ登場

何故其様に憑き纏ふぞ

ピア　憑き纏ふとはよう仰有った、えゝ尊そ、魔物でも憑けば宜い、先刻下された彼の手巾は、ありや何でムりますへ、それを受取つた妾は阿呆、模様を摸れなどゝ飛んでもない、いかにも〳〵貴郎の室に落ちて居て、落し主が判明りさうもない品物、それも其筈外の情婦からの貰ひ物、それに妾に模様を摸れい――サア〳〵御還し申します、何處ぞの人に、御遣りなさるが宜いわいな、此方や何處で拾うたのでも、模様を摸るのは眞平〳〵

オセ　コレ〳〵ピアンカ、何のこった

オセ　（獨語）ヤアあれこそ正しく拙者が手巾

ピア　今夜は兎も角、御膳立して御來臨を御待ち申します、若し今夜御來

臨がないなら、後は一昨日御待ち申しますぞへ

イア　さ、さ、後追懸けて御留めなされい　とビアンカ退場

カッ　實にさう致さずばなるまい、市中を喚めき廻るてムらう

イア　して晩餐は彼處にて

カッ　其心算で

イア　左樣ならば、後刻又御目に懸れませう、少々御話し申したい事がムります

カッ　何卒尋ねて來るやうに

イア　サア〈最早何にも仰有りますな　とカッシオ退場

オセ　（片隅の方より進出て）コレ、イアゴー如何して彼奴を殺して呉れうぞ

イア　御覽なされましたか、己が亂行をさも誇り顔なあの笑顔

オセ　おゝさ、イアゴー

イア　して又、手巾に御目を留められましたか

オセ　彼品は、拙者の手巾であったらうが

イア　確かに左樣でムりましたが、ても馬鹿らしいは夫人、折角カッシオに、御遣しなされたあの手巾が、外の情婦の手にあるとは、よも御存じは、ムるまい

オセ　五年も十年も縛って置いて、弄殺しに殺して遣りたい、それにつけても、口惜しいは、デスデモナ、美しい奴、いとしい奴

イア　其の御執念は、御棄てなされずばなりますまい

オセ　イヤ、今夜の中に亡き者にして、焦熱地獄へ墜す所存ぢや、迚も生けては置かれぬ奴、拙者が心は石のやう、打てば却て拳が傷れう――おゝ乍去、彼様な可愛の者が又とあらうか、玉座の側に侍つて如何な帝王をも左右し得る奴

イア　ハテ、其様な御心ては

オセ　イヤナニ、たゞ實際を申す計り、縫針の道には立優れ、糸竹の技に懸けては、猛獣の心をも和らぐる程の腕前あり、萬に才絶れ想裕に――

イア　左様に絶れておはする丈、一倍罪も深いといふもの

オセ　おゝ幾百千倍深いやら――そして彼のやうに柔順な性質

イア　餘り御柔順が過ぎました

オセ　實にさうぢや、乍去考へれば悲しいわい、おゝ考へれば情ない

イア　ハテ其様に御未練がムるなら、不義不貞御搆へなしの、御特許を御出しなされませ、閣下さへ御搆へなくば、誰が文句を云ひませうぞ

オセ　いや〳〵斬りさいなんで微塵にする、拙者を怪物に仕立てた奴

イア　おゝ何たる御醜行

オセ　人もあらうに部下の士官と

イア　益す以て

オセ　毒藥はないか、イアゴー、猶豫は無用、此の今夜――あの美しさ優しさが、此決心を鈍らせうも知れぬに依て、何にも云はず、唐突に此の今夜

イア　いや毒藥は御無用になされ、御床の中で――御自分で汚した、其現在の御床の中で、御縊めなさるが上分別

オセ　ウム、妙、々、それてこそ刑罰の旨意にも叶ふてあらう、至極妙

イア　して又カッシオ奴は、某が片付けますてムりませう、此夜半には吉左右を、必ず御聞かせ申しまする

オセ　滿足に思ふぞ、イアゴー

と奥にて喇叭の音聞ゆる（案内を申込む合圖也）

あれあの喇叭は

イア　エニスより何者か參りし事と察しまする、や、公よりの御使者、ロドビコー殿の御來臨てムります、夫人と御一緒に、それそこに御來なされました

ロドビコー、デスデモナ、及從者若干登場

ロド　大將殿御健勝て祝着致す

オセ　忝なう存じます

ロド　公爵幷に元老院より御見舞の御書面てムる

と封書をオセロに渡付する

オセ　方々より御好意の御書面、恭しく頂戴致しまする

とオセロ封書を開き讀む

デス　してロドビコー樣、何ぞ變った御話は

イア　ようこそ御來臨なされました

セド　いや忝ない、して副官カッシオには

イア　御健在てムります

デス　ロドビコー樣、御聞き下され、大將殿とカッシオ殿との其中に、ひよんな御不和が出來ましたわいなア、乍去、貴君の御盡力を願うたなら、屹

度故々に治まる事でムりませう

オセ　（獨語）其様な心で居るか

デス　何と仰有ります

オセ　（書面を讀む）「貴殿に於ては必ず御履行可有之――」

ロド　いや、貴女への御詞ではムらぬ、書面を御讀みなされてゞムる、はて大將殿とカッシオとが、左様に御不和になられましたか

デス　困った事になりましたわいな、カッシオ殿が不憫でなりませぬ故、どうぞ聞う治めたいものでムります

オセ　（獨語）えゝどうして呉れうぞ

デス　申し旦那様

オセ　（獨語）こゝな悪物めが

デス　どうやら立腹致した様子

ロド　若しや書面の趣が御氣に障ったのではあるまいか、カッシオ殿を代官として留め置き、大將殿には、御歸國あれとの趣と察しますれば

デス　左様ならば、妾は寧そ喜ばしう存じまする

オセ　眞實左様か

ダス　旦那様

オセ　汝は逆上致したな（汝はカッシオを此地に留めて、ヴニスに歸るをよも喜ばしとは思はじ、さるを喜ばしと云ふは汝逆上したるならむの意）それを見るこそ喜ばしい

デス　何故其様な事を、コレ申しオセロ殿

オセ　えゝこゝな魔物めが

とオセロ、デスデモナを打擲する

デス　其樣な御折檻を受くる覺えは

ロド　これはしたり、かやうな御擧動があらうとは、此眼で見たと誓を立てゝも、エニスの人々は信じますまい餘りの御處置でムる、夫人はあの樣にお泣きなされます、さゝ、御慰めなされませ

オセ　おゝ淺ましや、若し此大地が、女の涙で孕むなら、此奴が墮す涙の滴よりは、鰐魚が生えるであらう（鰐魚は人を食ふ時空涙を流すといふ、故に空涙を指して鰐魚の涙といふ）えゝ目通りを下れ〳〵

デス　そんなら御氣に障らぬやうに、妾は彼方へ參りませう

ロド　御柔順な事ではある——大將殿御呼還しなされませ

オセ　デスデモナ

とデス行きかゝる

デス　旦那樣

オセ　（ロドに向ひ）貴殿は彼女に何御用で

ロド　何某でムるか

オセ　いかにも、彼女を呼還せと、貴殿仰せられたてはムらぬか、彼女はよう還ります、眞直に行くかと思へば、忽ち又かへります、そしてよう泣きまする、そして柔順でムります、仰の如く柔順で、至極柔順で、至極柔順でムります（デスに向ひ）泣け〳〵いくらでも——（ロドに向ひ）此義に就いては——（デスに向ひ）おゝよくも工んだ空涙——（ロドに向ひ）某は歸國致せとの事にムります（デスに向ひ）行け〳〵後程呼びに遣るわ——（ロドに）謹んで仰に從ひまする、そしてエニスへ歸りまする——（デスに）行け、行けと申す

とデス退場

に――某が役目は、カッシオへ引渡し申すでムらう、そして今宵は何卒御會食が致したい、聊かサイプラスへ、貴殿を歡迎の志でムります――えゝ多情多淫の獸め

とオセ退場

ロド　さても〳〵、これが彼の元老院の人々が、完全無缺の名將と、歌ひ囃せるムールなるか、これが彼の、喜怒哀樂も冐すに由なく、其高德は災難の彈丸も觸るゝに難く、禍難の槍も貫くこと能はざりし、寛仁大度の英雄なるか

イア　大將には大分御變りなされました

ロド　あれでも正氣か、ちと氣が觸れては居ぬか

イア　御覽の通りでムります、某にはとやかう申す事は出來ませぬが、どうも尋常ではムりませぬ、其樣な事でなければよいがと存じまする

ロド　妻を打擲致すとは何事ぢや

イア　それも宜しい事ではムりませぬが、某は又、それよりも惡い事をなさらぬやうにと祈りまする

ロド　そも〳〵これが彼の習慣か、さては又、書面の趣に業を煮やし、箇樣な暴行をも致せしか

イア　某が見聞致した事もムりますれど、それを申上げるは、某の身分として、いかゞはしい事でムりまする、乍去、此後の御擧動に御目留められますれば、某が申さずとも、御合點の參ることがムりませう、いざ後から御出なされてどうなされるやら樣子を御覽なされませ

ロド　さては彼が人と成りを、今迄買被って居ったるか

第二場——城中の一室

オセロ、エミリア登場

オセ　然らば其方は、何も見た事はないのぢやな

エミ　聞いた事も、お疑ぐり申した事もムりませぬ

オセ　たゞ夫人とカッシオとが、一緒に居たを見た計り

エミ　去りながら其時には、何事もムりませず、御二方の御對話の一言一句も餘さずに、みんな此身が、伺ひましてムります

オセ　耳語などは一度も

エミ　決して左樣な事などは

と一同退場

オセ　又は其方に、其場を外させなどは

エミ　決して左樣な事も

オセ　扇子を取つて參れ、手袋を假面をなどゝ命じた事も

エミ　決して左樣なことはムりませぬ

オセ　とはまた不思議千萬

エミ　パテ、夫人の御身持の、お正しい事ならば、命を賭けても、此姿が保證ます、御疑念などはお棄てなされませ、御胸の汚れでムりませう、若し又何處ぞの惡人が、そんな告口を致したなら、アダムを騙した蛇程の天罰は眼前でムりませう、あの夫人が操正しくないならば、世界中に、幸福な男はムりますまい、どんな貞女も、不貞腐れと申されます

オセ　何はともあれ彼女を茲へ呼んで參れ

と エミ退場

云はせて置けば幾らでもいふ、乍去不義の媒介を致せし女、容易く實は吐かれまい、主の秘密を鎖し籠め置く、箪笥も同然のいたづら女、それで神前に跪づき、祈禱を捧ぐる事もあるは、此眼で見たる記憶がある

エミリ、デスデモナを伴なうて再登場

デス　旦那様、何御用でムります

オセ　近う〳〵

デス　して御用と仰有りまするは

オセ　其許の眼を見せて呉れよ、拙者の顔を面と見上げい

デス　怖いことをなされます

オセ　（エミリに）其方はいつもの見張をせい、彼方へ外して、扉を締めて、人が來らば、咳拂を致すなり、聲を立つるなり、報知らせて呉れよ、ハテ其方が仕馴れた職掌ぢやらうに、サ、、早う

と エミ退場

デス　コレ申し、何を仰有るのでムります、御詞の中に籠もる、御憤りは解せましたが、解すに解されぬ其御詞

オセ　ヤイ其許は何者ぢや

デス　貴郎の妻でムります、操正しい貴郎の妻でムります

オセ　然らばそれに相違ないと、誓文立てゝ云うて見い、やがて地獄へ落つるであらう（偽誓の罪に依り）さらずば天使を欺くばかりの其美貌、惡魔でさへも騙されて、手を束ねて引込まう、不義の罪に偽誓の罪、重ねて早

う奈落へ墮ちや、いやさ操正しいと誓って見い

デス　天に在す神様こそ、よっく御承知なされませう

オセ　惡魔の樣な其許が不實を、いかにも神樣は御承知なさらう

デス　不實とはそりや誰に何が不實でムりますぞへ

オセ　えゝ出て失せい、己れデスデモナ

デス　おゝ何たる事でムりませう、何故其樣に御泣きなされます、妾故の其御落涙でムりますか、若しや貴郎の御召還は、愚父の讒訴であらうとの御疑念ならば、此妾を御咎めは曲もない、貴郎に赤の他人ならば、妾にも赤の他人でムりませうに

オセ　天若し災を茲に降して、我を試み給ふとも、我が素頭の上に、幾その辛酸恥辱の數を雨降らし、困厄の淵に埋もる迄、我を陷れ給ふとも、まった此身は擒はれて、世に希望なき、奴隷の束縛を受けるとも、我が精神の何處にか一點の忍耐は存すべし、耐へ難きは長へに、世の物笑と語りつぎ、云ひつぎ傳へられむ一事ぞかし、乍去それもまだ忍ぶべし、我愛情の寶藏は、生命の潮く源泉、これあればこそ生きもする、これなくば何命のあらむ、さるを其源泉を、我今見棄て去らむとは、さては彼の汚らはしい、雌雄の墨奴が落合ひて、卵を產む爲めの溜池と他人手に交附し了さんとは、あゝ汝、忍耐といふ朱唇豐頰の天使も今は、其美はしき面の色を早や變へよ、魔界の凄味を額に色どれ

デス　よもや妾を淑しい女子と、思召さぬではムりますまい

オセ　實に淑しいな、肉舖に集く夏の蠅、產卵むだと思へば又孕む、其貞節が其方を其まゝ、おゝ汝、花美はしき野邊の草、餘りに香氣の深くして、

嗅げば五感を痛むるとは――寧そ其許といふものが、此世に生れて來なんだなら――

デス　心付かずに居りますれど、何ぞ妾に、過失でもムりますか

オセ　あゝ此美しい白紙が、淫婦の二字を題せむ爲めの料紙なるか――何過失を犯しゝとや、おゝ汝は君傾城に等しき女、汝が過失は口にするさへ、慚愧に顏は燃え焦げて、灰燼と成りも果てう、何過失を犯しゝとか、其過失には天も鼻を撮み、月も眼を瞑り、萬物に接吻を惜まぬ多情の風さへ、岩窟の中へ逃げ隱れ、聞きともないと潜むであらう、何過失も押の強い、面皮の厚い一夜女郎

デス　聞棄ならぬ其御言葉

オセ　其許は吃度賣婦でないか

デス　何のまア、貴君に捧げた此身體を、あだし男に指でも差させぬ其事が、賣女の行爲でない上は、決して〳〵左樣な者ではムりませぬ

オセ　何ぢや、賣女でない

デス　決して〳〵左樣なものでは

オセ　そのやうな密がない

デス　おゝ天つ神も御寛恕あれ、かやうな疑受けるのも、皆な此身の不束故

オセ　然らば拙者は、其許の寛恕を乞ふてあらう、近頃オセロと緣組した、エニスの淫婦めは、其許ぢやと思って居たは、コリヤ遠って居たさふな――（聲を上げ）これ〳〵女、天國の關の戸を守るてふ、セントピーターに對をなす、地獄の關守よ、此方へ入れ（エミリアを呼）（入れしなり）

エミリア再登場

これ〳〵エミリア、最早用事も果てた程に、此金は其方への禮ぢやぞよ、さらば確と錠を下し、屹度秘密に致すがよい

とオセ退場

エミ　我君には、何を思ふて御在遊ばすやら――夫人、いがゞ成されましたな

デス　妾は何やら半分夢の樣ぢやわいな

エミ　旦那樣には、何う遊ばしたのてムります

デス　何う致したとは誰が

エミ　ハテ、旦那樣てムります

デス　旦那樣とは

エミ　誰あらう、貴女の旦那樣てムります

デス　妾には最早旦那はないぞや、コレ喃エミリア、何事もいうて呉れまい、涙て返辭をするばかり、泣くにも泣かれぬ心の切なさ、どうぞ今夜は、婚禮の時用ゐた蓐被を、妾が臥床へ敷いてたもれ、忘れまいぞやそしてイアゴー殿を茲へちやつと呼んてたもれ

エミ　さてこそ何か變つた事が

とエミ退場

デス　此樣にして御心任せになつた方が、穩やかな仕打てあらう――てもの何の樣な譯があつて、たとひ此身に少しの落度があればとて、御咎めを受ける樣にはなつたのやら

エミリア、イアゴーを伴ひ再登場

イア　夫人、何御用てムります、アノ如何なされました

デス　妾には云ふ事も出來ぬわいな、幼少い小兒を躾けるには、手軟かに優しうせねばならぬもの、妾ぢやとて其通り、叱られるといふ事には、まだほんの小兒ぢやに

イア　ても何事でムります、夫人

エミ　聞いて下され我君が、夫人を賣女呼はり、聞くに聞かれぬ御惡口

デス　イアゴー殿、妾は其樣な者であらうか

イア　其樣なとは何のやうな

デス　今エミリアが申した通り、大將殿が云はれた樣な

エミ　賣女ぢやと仰有て、泥醉れた乞食が、夜鷹に惡口するとても、あれ程の事はよもあるまい

エミ　何が原因で、其樣な事を仰有りました

デス　妾はそれは知らぬわいな、妾はそんな女でない

イア　先づ〳〵其樣にお泣きなされますな、實に何といふ事であらう

エミ　立派な緣談の口をも止め、父上樣や、御生れ故郷、御友達をまで、御棄てなされたも何の爲め、賣女と呼ばれる爲めであらうか、これが泣かずに、どうマア御いてになられませう

デス　あぢきない身の上ぢやなア

イア　左樣な事を仰有るとは、ほんに御罰が當りませう、どうして其樣な御心には

デス　それを御承知は神ばっかり

エミ　これは的切饒舌な、諂諛な僞言な、さもしい心の惡漢が、何ぞよい役にでも、有付かうとての企圖事、有る事無い事告口したに相違ない、若

し此推量か違つたなら、命を取られても大事ない

イア　ヤイ、そんな奴があるものか、あるべき筈がないてはないか

デス　若しそんな者があつたなら、讒訴の罪は、どうぞ御宥免あるやうに、天に祈つて遣はさう

エミ　えゝまぬるい事ばつかり、そんな者があつたなら、首は縊つて其骨は、地獄の臼に投げて遣りたうムります、夫人を賣女などゝは我君も餘り胴慾な、夫人が誰と一緒に、どれ何處て、何時どうして、どんな疑はしい事がムりました、我君には必ず〳〵、何處ぞの横着な人非人な、惡漢にたぶらかされたのてムります、どうぞ天道樣の力にて、かやうな惡人の面皮を剝ぎ、あらゆる善人の手に鞭を取らせ、東の果から西の果まて、世界中の大路を裸體て渡し、打て〳〵、打ちのめしたら腹がゐやう

イア　聲が高いたしなめヤイ

エミ　忌まはしいは箇樣な奴、いつぞや貴郎へを突つついて、人もあらうに我君と、此妾と仔細ある樣に、恐れ多い嫌疑などを、懸けさせたも箇樣な奴

イア　こゝな大たわけめが

デス　イアゴー殿、どう致したらもう一度、舊の樣になるてあらう、どうぞ其方より我君に、仔細を伺つてたもれい喃、神樣もみそなはせ、此身に御咎めを受けるやうな、覺えは少しもないわいな（と跪づ）萬一此身が心の中てか、行爲に現してか、御寵愛を袖にするやうな事を致したなら、又はあだし男の、優しい姿に目を曝らし、優しい詞に耳傾くる樣な事があつたら、さては先方よりこそ、たとひ此身を振棄てうとも、此身の夫

を思ふ愛情が、昔も今も將來も、衰ふる樣な事があったら、幾その苦艱に沈み果つる法もあれ、御恨には存じませぬ、夫の邪慳募らば募れ、其邪慳が此命は奪ふとも、此愛は奪はれぬ、賣女などゝは、口にするさへ懍然とする、世界の浮氣を團めても、其樣な擧動を、此身にはさせられまい

イア　先づ〳〵御耐へなされませ、これはほんの我君が、只一時の御氣紛れ、國事に係る御憤りて、夫人に八ッ當りなされたものてムりませうデス　只だそれだけの事ならば——

イア　それだけの事てムりまする、某が保證ませう（喇叭の音聞ゆる）御聞なされ彼の喇叭は晩餐の調た合圖、エニスの御使者が御待兼てムりませう、さゝ御出なされませ、御泣き遊ばしますな、御心配の事はムりますまい

とデス、エミ退場

ロデリゴー登場

ロデ　おゝこれはロデリゴー殿

ロデ　貴殿が眞實親切に、某を取持ち呉るゝとは、どうも合點が參らぬが

イア　ハテ然らば、何不親切な行爲を致したか

ロデ　何ぢや彼ぢやと、種々の策略を毎日授けて下されたが、今の有樣は何ぢや、望みの叶へさうな樣子は少しもなく、機會といふ機會は取逃がし、早や此上に我慢は成りませぬ、これ迄見た大馬鹿を、此後も見ることは致さぬ覺悟

イア　先づ〳〵聞いて呉れ、ロデリゴー

ロデ　いやこれまて既に聞き過きた、貴殿が詞と行爲とはまるで反對

イア　酷い事を云はるゝ

ロデ　實際を申したばかり、某は早や一文なし、デスデモナに贈る爲め、足下に托した寶玉ばかりて、隨分物堅い比丘尼をさへ、動かす事も出來たらうに、其時の足下が詞に、彼女は快く受納して、早速某に親近を望むとの事であったが、少しも其樣な事はない

イア　ハテ辛抱せい、宜いてはないか

ロデ　宜いてはないか、辛抱せい――いやもう辛抱はならぬ、宜い事は少しもない、これは怪しからぬ、某はどうもまんまと騙されたやうぢや

イア　宜しい〳〵

ロデ　宜しい事は少しもない、此上は某自身て、デスデモナに何も彼も打明けて、若し彼女が寶玉を返さばよし、これ迄の願望は取消して、道ならぬ戀は棄てもせう、若しさもなくば相手は足下、此腹いせは屹度致す

イア　それていふことも、もうあるまい

ロデ　某は決心の程をいうたばかり

ロア　ハテそれて足下に、勇氣のあることが判明致した、これから以後は、足下を畏敬の念が、以前に倍して身共の胸中に湧くてあらう、コレコレ近う〳〵、足下の詰問は、尤もてはあるが、身共とても、此事に就いては、隨分忠實に働いた心算

ロデ　その形跡は見えなんだ

イア　成る程形跡とては、まだ確然に現れぬ、其疑もいかにも一理ないてはない、乍去ロデリゴー、別して今は疑はぬが、果して足下に、確乎たる

決心と勇氣膽略があるならば、今夜こそ發表時、その上にて明日の晩、彼のデスデモナが、足下の手に入らなんだら、足下を欺く詭辯の罪、此世の外に身共を追ひこくり、如何やうにもして、一命を取られても苦しうない

ロデ　してそれはどんな事で、一理屈ある事か、出來ぬ相談ではムるまいな

イア　ヱニスより更めての命令で、カッシオをオセロの後任と定むるとの事

ロデ　それは眞實か、すりやオセロにはデスデモナ同道にて、再びヱニスへ還るでムらう

イア　處がオセロには、故郷なるモリタニアへ參るとの事、就ては此島に何か一樁事持上り、出發延期とならぬ上は、彼のデスデモナも、無論ここには居られぬ譯、然るに其延期には、カッシオを退者にする程、確かな手は外にない

ロデ　してカッシオを退者とは

イア　はて、オセロの後任にえ堪へぬやう、頭の臚でも打碎き

ロデ　それを某にさせうといふ

イア　いかにも足下が、自分の利益を圖って、取るべきものを取らうといふなら――カッシオは今夜馴染の賣女と、晩餐を共にする筈で、身共も後より參る手筈、彼奴自身は、己が名譽ある任命を、まだ承知は致して居らぬ、足下は途中に待伏して、彼が歸路を狙ふがよい、すりや身共は十二時と一時の間に、歸るやうに計らふ故、足下の隨意に襲ふがよい、

身共も手傳の爲め、近くに居る故、取りも直さず押み討ち、ハテ其樣に驚いて、立停らずと一緒に行かう、これは是非足下の手づから、彼を亡き者にせねばならぬといふ、そこの所を、よっく話してお聞かせ申さう、最早晩餐の刻限も迫って來て、夜も追々更けるばかり、いざ〳〵

ロデ　然らばそこの道理をとっくり合點のゆくやうに聞かせて下されイア　屹度合點が參るであらう

と二人退場

第三場——城内の他の一室

オセロ、ロドビコー、デスデモナ、エミリア及侍者登場

ロド　何卒最早御送り下されますな

オセ　おゝ御免あれ、少々歩行致した方が却て保養になりまする

ロド　さらば夫人、御休みなされませ、誠に難有うムりました

デス　貴郎の御來臨こそ、眞にお嬉しうムりました

オセ　さゝ、何卒御出懸下され——おゝコレ——デステモナ——

デス　且那樣

オセ　（デスデモナに向ひ）其許は直ぐに寢むが宜いぞ、間もなく歸館致さう程に、

エミ　かしづきの者も退らせ置け、屹度其通りに致すのぢやぞ

デス　畏まりました

とオセロ、ロドビコ侍者退場

エミ　どう遊ばしました、先刻よりも穩かにおなりなされた御樣子

デス　間もなくお歸りなさる程に、妾は早速寢室へ往て、そして其方は退

らせて置けとの御命令

エミ　アノ妾は退らせて

デス　仰せぢやに依てエミリア、其方は妾の寢衣を出して、そして最早往んでたもれ、今は何でも御機嫌任せがよいわいの

エミ　寧そ貴女が始めから、旦那樣とかういふ譯に、おなりなさらずばと、口惜しいやうに思はれます

デス　妾はさうも思はぬわいな、旦那樣の御不親切、御惡口、御憤怒の其中にも――どうぞ留針を外してたも――お懷かしさが彌增すばかり

エミ　仰せつけの御蓐被を、御床へ敷いて置きましてムります

デス　添けない、ほんに女心は愚かしいもの――若し此身が、其方より先に死んだなら、屍骸はどうぞ其蓐被で包んでたもれや

エミ　ハテ、譯もない事仰有ります

デス　妾が母樣の腰元に、バルバラといふ一人の處女、思ふ男が亂心故、振棄てられて歌うた歌、柳の歌とて、古いものではあるけれど、處女の身の上に叶うた歌、それを歌ひながら死にやったが、今夜は何故か其歌が、妾の胸を離れぬわいな、彼のバルバラがしたやうに、頭を片側へうなゐれて、妾も歌って見たうてならぬ――どうぞ早うしてたもれいのう

エミ　御寢衣を取て參りませうか

デス　それはよい程に、この留針を取てたもれ――でも彼のロドビコー樣は、美しい御方ぢやなァ

エミ　餘ッ程御奇麗でムります

デス　そして舌辯がさわやかて

エミ　ヱニスの或る貴婦人で、それは〳〵御執心、彼の御方の下唇の一と觸れ故なら、バレイスチン迄も、徒跳參りをなさらうといふのを存じて居ります

デス　（柳の歌ふ）

青葉が下の木下陰　嘆きに沈む乙女子が

（青柳の歌を歌へや青柳の（柳は失戀の表象にして、柳々云々といふは十六世紀頃の詩歌の慣句の常用文字））

頭は膝に手は胸に　思ひは何處あなあはれ

（柳、々、歌へよ柳）

側を流るゝ里川の　水も咽びぬ音にたてゝ

（柳、々、歌へよ柳）

腸絞る涙には　石も溶けてや流るらむ

これ（脱ぎたる衣裳）を其方へ置いてたもれ

（柳、々、歌へよ柳）

早くしてたもといふに間もなく御歸りなさらうわいな

青柳の枝を此身の花冠（柳の花冠を着くるは戀人にすてられたるを意味す）人をな尤めそ棄てられし、罪は此身にあるものを

いや此次はそれてない――戸を叩くのはありや何ぢや

エミ　あれは風でムります

デス　つれなき人よと怨ずれば、つれなき人の詞哉

他し契を我もせば、他し男と汝も寢よ

そんなら其方は、彼方へ退って寢みやいの、どうも目が痒うてならぬけ

れど、たんと泣けといふ前徵かいな

エミ　どうのかうのと申す譯てはムりますまい

デス　妾は其樣な事を聞いて居る――おゝ男といふものは――喃エミリア――道ならぬ道を蹈んで、良人を辱かしむると云ふ樣な女子があらうと、其方や眞實思やるか

エミ　左樣な女子もムりませう、申す迄もムりませぬ

デス　其方や隨分、そんな事も爲かねぬ氣か

エミ　ハテ、貴女は御厭てムりますか

デス　天つ神もみそなはせ、そのやうな事は

エミ　妾とても、天つ神のみそなはす前では、眞平御免てムります、暗がりても出來ますものを（エミリアは冗談半分心にもなき事を云ふと知るべし）

デス　世界を代物に貰つても、そのやうな事を爲るのは、いやてはないか

エミ　世界は廣うムります、價値に蹈んても大したもの、小さい罪過と、代へ事にはなりませぬ

デス　何であらうと、其方がそのやうな事を爲やうとは

エミ　いや妾ならば致しませう、致した上て其償ひを致します、そりや妾とても、指環の一個や、天鵞絨の一二反、衣服調度、被り物や、履き物、其外何でも、このやうな詰らぬ物で、其樣な大それた事は致しませねど、世界の寶と申す上は――ハテ良人に、帝王の富を得させう爲めなら、侮辱を與へたとて、誰が惜しいと思ひませう、末は奈落へ墮されても構ふ事てはムりませぬ

デス　たとひ世界の寶に代へうと、妾は其樣なことはいやぢやわいの

エミ　罪過と申すも、それは世間の眼から見て罪過、世界世間を代物に貰った上は、世間は我が有、どうにてもなります故、早速よいやうに、直すが宜しうムりませう

デス　いや其樣な女子が、よもやあらうとは思はれぬ

エミ　ムりますとも〳〵、世の中が塞がる程ムります、乍去妻の不品行は畢竟夫の過失、夫たる者が夫の義務を等閑にして、妻の所有品を外の手文庫へ流しこみ、又は根もない嫉妬にいらだって、酷たらしう壓へつけ、撃打擲やら小遣錢の減額、かうなっては女ぢやとて、五分の魂はムります、淑雅は女の常と云ひながら、復讐の心もないものはムりませぬ、女房ぢやとて、亭主同樣美しいものを見る目もあれば、好い香を嗅ぐ鼻もあり、甘い苦いを嘗めわける口もあるといふ事を、どうぞ男に知らせたい、不實な男が我が妻を袖にして、外の女子に乘替へるは、何故でムりませう、初めは座興に手を出すのを、自然に出て來る愛情が、育て上げるのでムりませうが、原因を糺せば、浮氣故、女ぢやとて座興も致せば、愛情もあり、浮氣心もムります、なりや男といふものが、女子を大切にするがよいではムりませぬか、さもなくば、女子のする過失は、男のする過失が、敎ゆるものぢやと、ちつとは考へたが宜ございます

デス　惡を惡の模範とせず、人の惡見て我身を正す、習慣をつけたいが妾の願ひ、そんなら、早う往て寢みやいのう

と二人退場

第五幕

第一場――サイプラス　街上

イアゴー、ロデリゴー登場

イア　此處の隅に隱れて待つがよい、間もなく參る事であらう、其業物の鞘を拂って、おもいれうむと刺すがよい、早う〳〵、恐れる事はない、身共も後に居る程に、お互の存亡に拘はる事、そこをよっく考へて、決心の臍を確かりと

ロデ　屹度手近に居て下され、ひよっと失錯らぬものでもない

イア　此通り手近に居る、何でも氣を大くして、泰然と搆へて居るがよい

とイア後へ立退く

ロデ　どうも氣の進む仕事ではないが、なる程仔細を聞けば尤ぢや、何も人一人、亡きものにする分の事、此劍が一躍り、それで彼奴は落命か

イア　漸う青二才の急所を突いて一憤發させて呉れたが、首尾克くカッシオを殺すか、但しカッシオに殺されるか、又は雙方倶斃れか、何の道利益は乃公につく、ロデリゴーが生きるとすれば、デスデモナへの贈物ぢやと詐て、騙り取た金銀寶玉、あれを返せとせがみかくる、いやこれはならぬ、然らばカッシオが存ると致せば、彼が此世に居る間は、乃公は何時でも壓されどうし、其上ムールが永い中には、乃公の云うた告口を彼に語る事がないとも限らぬ、それこそ此方が危い〳〵、彼奴も到底生けては置かれぬ、それは兎に角、あの跫音はたしかにカッシオ

カッシオ登場

ロデ　あれこそ彼奴の瑠音ぢやな――汝、思ひ知れッ

とカッシオを刺す

カッ　わが着たる衣裳には、汝等の知らぬ鋼鐵あればこそ、さらずば其一刀で、我は敢なくなったであらう、いざ〳〵今度は、汝が衣裳を試して見やうか

と抜劍してロデリゴーを傷くる

ロデ　おゝ某は殺された

と倒れる、イアゴー躍り出て後よりカッシオの脛を薙ぎ逃げて行く

カッ　えゝやられた、一生不具の身となった――出會ひめされ人々、人殺し人殺し

とカッシオ倒れる

オセロ登場

オセ　彼の聲は正しくカッシオ、イアゴーがいしくも約束を守り居ったな

ロデ　おゝ悪い事を致したわい（と後悔の体）

オセ　さてこそ思ふに違はず

カッ　おゝ助けを早う、燈火を――外科醫を――

オセ　彼奴ぢや〳〵――てもイアゴーは忠勇無二の男ぢやなァ、上官の恥辱を思ふ事、これ程迄に深いとは、よし今は其方が摸範――汝賣女、知らずや汝がいとしの姦夫は、こゝに殺され倒れてあるに、汝が命運も瞬く間――汝が可愛の其眸も、今は我胸中に消え失せしぞ、邪淫の汚

れにしみた寢床を、邪淫の血にて洗って呉れむ

ロドビコー、グラチアノ登場　とオセ退場

カツ　ヤア夜番の者は居らぬか、通行の人はあらぬか、人殺し〳〵

グラ　ハテ何事かあると見える、あの物凄い叫び聲は

カツ　おゝ助けて呉れい

ロド　や、お聞きなされ

ロデ　おゝ自分は哀れなものぢやな

ロド　何やら呻聲が二度三度、物凄い晩ではある、こりや人を誘ふ罠かも知れぬ、たった二人で聲する方へ近寄るは、危險な事でムりまする

ロデ　誰一人來て呉れぬ、出血して死ぬばかりぢや

ロド　あれ、あれは

イアゴー燈火を持て　來る

グラ　上衣も着けぬ男が一人、燈火と腰の物を携へて參りました

イア　其處に居るのは誰ぢや、人殺と叫ぶは何者ぢや

ロド　イヤ此方共は存ぜぬわい

イア　今の叫び聲を御聞きなさらぬか

カツ　此處ぢや〳〵、助けを頼む

イア　何事ぢや

グラ　某の見る所では、これはオセロ殿の旗手でムりませう

ロド　ほんにさうぢや、かねて聞いた剛の者

イア　其樣な凄まじい聲を立てるは何者ぢや

カッ　さういふはイアゴーではないか、某は斬られた、惡徒の爲めに闇打ちに遭うた、何卒介抱を頼む〳〵

イア　これはしたり、副官殿か、さて〳〵何奴が此樣な

カッ　下手人の中の一人は、まだ此邊に居るてあらう、逃げ了ほせは叶はぬ筈

イア　おゝ惡むべき卑怯者――（ロデゴーに向ひ）其處に御在なさるは何誰ぢや、此方へ來て御手傳へ下されい

ロデ　おゝ助けて下されこゝぢや〳〵

カッ　それその聲は下手人の一人

イア　おゝ殘忍無道の卑怯者めが

と云ふより早くイアゴーロデゴを刺す

ロデ　ヤイ、イアゴーの極道者、おゝ人非人の此犬め

イア　闇討とは卑怯な奴、殘忍なる盜賊奴等は何處へ往った――ハテ此町の靜けさは、ヤア〳〵辻斬ぢや〳〵――貴殿方は如何なる御方ぢや、善人か惡人か

ロド　善か惡か、我等の素振を見て御判じあれい

イア　さう仰有るはロドビゴー閣下では

ロド　左樣ぢや

イア　これは御免下されませ、カッシォ殿が、何者にか闇討され、こゝに倒れて御在なされます

グラ　何とカッシォ殿が

イア　御怪我はどのやうてムります

カッ　片脚を斬取られ――

イア　ハテサテ飛んだ事でムる、方々、何卒燈火を――御傷は某が襯衣で包みまする

ピアンカ登場

ピア　何事でムります、今の聲は何誰でムります

イア　何、今の聲は何誰ぢや

ピア　こりや、カッシオ様ぢや、いとしい〳〵カッシオ様、申しカッシオ様

カッシオ様

イア　おゝこれは評判の賣女ぢやな――モシ、カッシオ殿、開討の下手人に、思ひ當りはムりませぬか

カッ　少しも

グラ　さて〳〵、かやうな所で面會とは、某は貴殿を尋ねて居りし所

イア　其紐を御貸し下され、左様〳〵、そしてお樂に御連れ申すやうに轎をお取寄せ下さりませ

ピア　アレ〳〵、御氣が遠くなる御様子、申しカッシオ様〳〵〳〵

イア　、時に方々、某は此女が惡者の仲間であらうと疑ひまする――暫しの御辛抱でムる、カッシオ殿、ちと燈火をお貸なされ（と燈火にてロデの屍體を見て）ヤ、何うやら此顔に見覺えが、ハテ不思議、某が豫て親しく致す、同鄉人のロデリゴーでは、否々、左様な事がよもや――いや矢ッ張り、南無三、ロデリゴーぢや

グラ　何と、アノ、エニスの

イア　左様でムります、貴殿も御存じでムりますか

グラ　存じて居る段てはない

イア　さういふ貴殿は、グラチアノ閣下てムりましたか、これは御容赦下さりませ、此非常の騒ぎにて、遂御見それ申しました

グラ　足下に過しは何より満足

イア　カッシオ殿、如何てムります――ハテ、轎はどうした事やら

グラ　さても〳〵ロデリゴーてあったか

イア　左様てムります――おゝようこそ〳〵、それ轎が参った（轎持来る）腕力ある者に、氣を付て、カッシオ殿を舁がせて御送り申して下され、某は扈從の軍醫をこれから呼んて参ります――（向ひアに）コレ女、其處退いた、要らざる介抱措いて呉りやれ――してカッシオ殿、彼處に斃れて居るは、某が親友てムりますが、豫てより何か御確執てもムりましたか

カッ　左様なことは少しもない、顔を見た事もない男ぢや

イア　（向ひアに）何故其様に青い顔を――サゝ早うカッシオ殿を御宅へ

とカッシオ、ロデリゴー共擔ぎ去らるゝ

暫く〳〵方々――コレ女、其方の顔の青い事よ喃――方々、此女の眼の色の凄さを御覽なされましたか、ぢっと御見詰めなさらば、どうやら御合點の參ることがムりませう、どうぞ注意して御覽なされ、御了解になりましたか、御兩所、假令舌は用はずとも、罪ある者は自ら語るものてムりまする

エミ　エミリア登場

何事てムります、何事てムりますな

イア　カッシオ殿が、ロデリゴー、其外行衛は判明らねど、數多の惡漢に闇討せられ、まちっとで命もない所、ロデリゴーは死んで居る

エミ　あのマア好い御方が、あの優雅なカッシオ殿が

イア　これも密通の報酬、仕方がない――コレ、エミリア、其方は今夜カッシオ殿が何處で晩餐を認めたか、それをよく糺して呉れよ――（ピアに向ひ）ヤア汝は今の詞を聞いて慄へて居るな

ピア　其晩餐は妾の宿で認めましたが、それ故慄へなどは致しませぬわいなァ

イア　おゝ汝の宿でカッシオ殿が――然らば汝は此某と一緒に參れ

エミ　えゝさうであったか、さりとは惡い傾城殿

ピア　何のいなァ、左樣な者ではござんせぬ、さういふ御前と變りはない、正しい生活を致すもの

エミ　此妾と變りがない、えゝ厚顏しい

イア　いや方々、カッシオ殿の傷口を、早う始末致させうてはムりませぬか――ヤイ女、汝には白狀せる事實がある――エミリア、其方は營中に急ぎ參り、大將殿と夫人に、此始末を言上致せ――イザ方々、どうぞ御出下さりませ――（白旁）あゝ想へば此今夜こそ、我が一身の浮沈の瀬戸際

と一同退場

第二場――城内の寢室、デスデモナ、臥床の上に眠れる躰、一燈微かに四邊を照らし居る

オセロ登場

オセ　空恐ろしい彼女が罪業、口にするさへ慄然として、清淨無垢と豫て聞く、天上の星宿に聞かるゝも恥かしい、其罪業に比ぶれば、我が此行為も何のその――とはいへ、大理石像を欺く滑かさ、雪より白き玉の肌に、刀の痕を刻み込み、流血淋漓の酷たらしさを、眼前見んは思ひも寄らず、さはれ殺さにや置かれぬ彼女が身の上、生かして置かば騙さるゝ男の數の増しやせむ、さらば先づ燈火を消して、次に其許が燈火(生命)を――おゝ燃ゆる燈火は今消すとも、悔ゆることあらば、再び燃やす事もならう、造化が妙技の摸型たる汝我が妻デスデモナ、一たび其許が魂の、其燈火を消したる上は、我プロメッスならぬ身の、天火を偸んで又と再び、其燈火が點けられうか、其許が唇上の苔の花を、一度刈取る其上は、二度の生命は與へ難し、萎み果つるは眼のあたり、おゝさらば、幹ながら最一度香氣を嗅いで見む(接吻する)正義の刃をも鈍らせむず、此香ばしき息づかひ、さらば最一度、又最一度(又接吻する)たとひ死してもかくてあらば、其許を殺した其後でも、尚戀しさの止みはせまい――これを最後に又最一度(又接吻する)かばかり可憐に、かばかり薄命の者があらうか、想へば涙の種ながら、我が心は石の如く、我が悲みは神の悲み、愛すればこそ懲しもする――おゝ目が覺めたか

デス　何誰でムります、旦那樣か

オセ　おゝ、デスデモナ

デス　どうぞ御寢み遊ばしませ

オセ　其許は今夜、よう祈禱を致したか

デス　致しましてムります

オセ　何ぞ未だ懺悔もせず、神恕も乞はぬ罪科があるならば、今より直様致すがよい

デス　そりやどういふお意味で

オセ　ハテ手早く致せと申すに、拙者は此處に待ち居るぞ、覺悟も致さぬ其許が魂を、闇より闇へは遣りたうない、いや〳〵拙者とても其許が魂をまで殺しは致さぬ

デス　何と仰有ります、妾を殺す——

オセ　いかにも其許を

デス　おゝそんなら、神もお慈悲を、どうぞ此身に垂れさせ給へ

オセ　アーメン——これは拙者の心から

デス　それ程の御心なら、寧そお殺し遊ばしますな

オセ　フム何と

デス　とは申せ、おゝ怖や、其樣に御目をぎろ〳〵なされますと、恐ろしい御血相に見えまする、心に疾ましい事もないからは、世に恐ろしい物はない筈ながら、どうやら身の毛もよだつやうな

オセ　犯しゝ罪を思うがよい

デス　其罪とやらは貴郎への心中立てムりますか

オセ　いかにも其心中立故、其許が命を取らねばならぬ

デス　夫を慕うて殺さるゝとは、そりや餘まり曲がない、おゝ其樣に下唇をお嚙みなさるは、何のやうな恐ろしい御心か、御身躰がまるてぶるぶる、こりやどういふ事をなさるので、どうぞ此身をどうかう遊ばす

のてはないやうに

オセ　默れ、靜かに致せ

デス　靜かにも致しませうが、何う遊ばすのでムります

オセ　拙者が秘藏の彼の手巾、其許に與へ置きしを、カッシオに贈りしな

デス　けしからぬ事を仰有ります、カッシオを御呼びなされて、御聞き糺しなされませ、神かけて左樣な事は

オセ　又ぞろ神を引合に、心にもない僞誓は致さぬがよい、臨終の床に臥しながら

デス　まだ死なうとは思ひませぬ

オセ　いや即刻死なして遣はす、ぢやに依て、殘りなう懺悔を致すがよい、誓文立てゝ嫌疑の條々、さら〳〵と云ひ解くとも、拙者が胸中にいたましくも、凝り固まれる確信を、奈何ともする事は叶ふまい、いさいさ殺して遣はす

デス　此上は神よ御慈悲を

オセ　拙者も「アーメン」を唱へて遣らすぞ

デス　そしてどうぞ貴郎も御慈悲を――決して〳〵此妾は、貴郎に背きは致しませぬ、カッシオを愛したなどゝ、それは神樣も御宥恕あるだけ、誰を愛そと宜いだけはいざ知らず、戀の紀念品を贈りなどは致しませぬ

オセ　いや〳〵拙者は彼の手巾をカッシオが携帶致すを確と認めた、えゝこゝな罰當りが、犧牲を供ずる老僧の、冷靜なる心をもて、汝を正義の犧牲と屠らむとこそ思ひしに、重ね〳〵の僞誓をもて、我を憤怒の

奴隷となし、我が今夜の行爲を、たゞ殘忍なる殺戮と世に歌はする口惜しさ、拙者は確と手巾を見たぞや

デス　そんならそれはカッシォが、拾うたのでござんせう、貯った覺えはムりませぬ、どうぞ彼を御寄びなされて、實を御糺し遊ばしまし

オセ　彼奴は既に白狀致した

デス　何とてムります

オセ　汝と馴染を重ねたことを

デス　馴染とは不義の馴染を

オセ　いふにや及ぶ

デス　カッシォが左樣な事は申しますまい

オセ　いかにも、最早彼には口がない、忠實者のイアゴーが其樣に致した筈

デス　おゝ、どうやら心に安からぬ思ひの致しますは――さては最早殺されましたか

オセ　命の數が、髮の毛の數程あるとも、拙者が復讐の一念は其命を一つ〳〵扶り取らずば腹が癒ぬ

デス　さてはカッシォは無實に死し、妾も濡衣を着たまゝで――

オセ　ヤイ〳〵賣女、我面前をも憚らず、カッシォ故に泣きやるのか

デス　おゝせめて御勘當に――御手討だけは御容赦を

オセ　默れ賣女

デス　そんなら明日迄御猶豫を、今夜一夜は生存へて居たうムります

オセ　ならぬ〳〵、若し抗うたら――

デス　せめてたった半時程

オセ　既に取懸る上からは、少しの猶豫も相成らぬ

デス　そんなら祈禱を一言申す程の間

オセ　それも最早相成らぬ、いで

（とオセ、デスを壓殺する、同時に扉の外にてエミリアの聲）

エミ　（奥にて）御前様〳〵、申し御前様〳〵

オセ　まだ聲を立て居るか、まだ死なぬか、死にきらぬか、酷いやうでも、慈悲も深い此拙者、いつまでも此苦痛を與へては置かぬ、そら〳〵どうぢや

エミ　（奥にて）コレ申し御前様〳〵

オセ　誰ぢや

エミ　（奥にて）申し御前様、申上度い事がムります

オセ　おゝエミリアぢやな、今直に開て遣す――いやとう〳〵死に居った、大方カッシオの死んだ報知であらう、騒がしい聲を立て居ったな――最早動かぬやうぢや、生ある者とは思はれぬ――さてエミリアが此處へ參る、差支はあるまいか――又動くやうぢや、いやさうでもない――さて何としたら宜しからう、エミリアが參る上は、屹度妻に詞を懸けるであらう――あゝ妻、妻、妻とは誰の妻ぢや、此身に最早妻はないに、おゝ堪へ難き心痛ぢやな、そも〳〵今日は如何なる惡日ぞ、日月蝕して天柱碎け、地維裂けむとはするなるか

エミ　（奥にて）どうぞ御前様、申上たい事がムります

オセ　おゝ、忘れて居た、這入るが宜いエミリア、待てよ今直ぐに開ける、先づ帷帳（エミリアが横はれる寢臺の）を引いて置いて――何處ぢや

エミリア登場

さて何事ぢや

エミ　聞くも恐ろしい闇討が、遂アノ彼處に

オセ　何と、それは今か

エミ　たった今でムります

オセ　傳へ聞く、月其軌道を彷徨ひ出で、我が世界に近寄る時は、人皆な狂ひ出るとか、さては今夜もその樣な

エミ　御聞きなされ、カッシオ殿が、ロデリゴーと申す、エニスから參った若者を殺しましてムります

オセ　ロデリゴーが殺されて、それてカッシオも殺されたか

と扉を明ける

エミ　いえ〳〵カッシオは殺されませぬ

オセ　カッシオは殺されぬ、さては殺害の目算外れ、復讐の快事もはや是まで

デス　（帳帳の中より）おゝ非業の最期で死ぬるのかいのう

エミ　アレあの聲は

オセ　あの聲とは、どれ何處に

エミ　是はしたり夫人の御聲でムりました、誰ぞ早う御助けを、も一度仰有て下さりませ、コレ申しデスデモナ樣、夫人、も一度御聲を

デス　無實の罪で死ぬわいのう

エミ　してそれは、誰がそのやうになされました

デス　誰でもない我からぢや、おゝこれが訣別ぞや、旦那樣に宜しく申上

てたもれ、おゝさらば　と絶命する

オセ　ハテ、如何なれば此女が非業の最期を遂るぞとは

エミ　知る人ぞ知る。

オセ　拙者の所爲でない事は、彼女自らも云ひし通り

エミ　成る程其樣に仰有りましたが、こりや事實を糺さいでは

オセ　死ぬ迄人を欺く女、焦熱地獄へ往ったてあらう、彼女を殺したは拙者ぢやわい

エミ　さて〳〵、天使のやうな夫人の御心榮、それに引かへ御前樣は惡鬼羅刹

オセ　淫奔者となり果てゝ、不義の密通を致した奴

エミ　さういふ御前樣こそ夫人に、無き名を負はする魔か鬼か

オセ　彼奴は水性の浮氣女

エミ　浮氣ぢやなどゝ、あの神々しい程、操正しい夫人を、仰せある御前樣は、短慮一徹の火性男

オセ　彼奴カッシオが自由になったは事實、イアゴーに問うて見るがよい、然るべき理由もなく、かゝる無殘の所業に及びしなら、此身は奈落の底の底に、追墮される法もあれ、イアゴーが一切承知ぢや

エミ　あのイアゴーが

オセ　汝の夫イアゴーが

エミ　アノ夫人が、不義密通をなされたとやらを

オセ　いかにもカッシオ奴と——ハテ彼女が若貞女であったら、琉璃瑪瑙

の山を築いた、別天地が湧き出るとも、換へ事には致さぬわ

エミ　おゝイアゴー殿が

オセ　イアゴーが始めてかくと報告せて呉れしぞ、實に汝が夫は律義一遍行爲の端に附着いて居る、塵一片の汚れても、厭はずには居られぬ男

エミ　おゝイアゴー殿が

オセ　幾度それを繰返すぞ、汝が夫のイアゴーぢやと確と申すに

エミ　おゝ夫人「戀」の弱點につけ入りて、「惡」奴が書いた一狂言、あのイアゴーが、夫人が不義したなどゝ

オセ　さうぢや〳〵汝の夫のイアゴーが——コレ、了解ったか女、拙者が忠友、汝が夫、正直な〳〵イアゴーがぢや

エミ　若し左樣な事を申したなら、神罰の程も恐ろしい、イアゴーの魂が、日に嬰粟粒程づゝ蝕りもせよ、跡方もない讒謗ばかりでも夫人は御氣の毒、あのやうに御慕ひなされた殿御といふは、此やうな人非人

オセ　何と

エミ　何とても御存分になさりませ、此やうな事をなされるとは、彼のやうな夫人の、良人とは申されぬ、その通りどうで天へは往かれぬ御身

オセ　默り居らう、それが汝の身の爲めぢやわ

エミ　はて、どのやうな目に遇はうとも、遇はせる貴郎の御力より、堪ゆる力が大方二倍、ほんに阿呆らしい殿樣ぢや、塵芥同然の御身ながら、ようまア、此やうな大それた——貴郎の刃が、何のどれほど怖からう、一つの生命を二十度三十度失しても、面皮を剝がずに措きませうか、おう

誰ぞ助けを〳〵、ムール殿が、夫人を殺害致しました、人殺し〳〵

モンタノ、グラチアノ、イアゴー等登場

モン　何事てムる、コレ〳〵大將殿

エミ　おゝ良人、イアゴー殿、貴郎はまァようも〳〵、殺人の大罪を、一身に負はねばならぬやうなことをなされたなァ

グラ　ハテ何事てムる

エミ　イアゴー殿、貴郎が實の男なら、こゝな惡漢（を指す）を詮義して下さんせ、此人のいやるには、夫人が不義したと貴郎が告げたとの事なれど、そんな事はよもあるまい、貴郎ぢやとてそんな惡者ではあるまいが、早ういうて見て下され、此胸が張裂くるやうぢやわいなァ

イア　いかにも拙者は、自分の考を申上げた、尤もそれも大將殿が、確かな事實と御認めなされたまでの事

エミ　それはどうても、夫人が不義したなどゝ、申上たは實かい喃

イア　いやる通りぢや

エミ　そんなら貴郎は、眞赤な恐ろしい虛言を申上げたのぢや、神かけてそれは虛搨ぢや、あのまゝ夫人が、カッシオ殿と不義などゝ——「カッシオ殿と」とは、これも貴郎の告口かいな

イア　いかにもカッシオと——ヤイ女、其口は噤んで置け

エミ　此口を噤んでよいものか、喋舌り拔かねば腹がいぬ、御聞下され夫人は、あれなる寢臺の上で、敢ない御最期を成されました

一同　なゝ何とてムる

エミ　これと申すも、貴郎の虛搨から起ったこと

オセ　いや方々、其樣に驚いて御見詰めなさるな、これは事實でムる

グラ　ハテ奇ッ怪な事實ぢやなァ

モン　實に奇ッ怪至極な所業

エミ　こりや的切貴郎の計畧、妾の胸は一杯ぢや、さうぢや、そのやうな臭氣がする、前にもどうやらさう思うた、悲しや寧そ死にたいわいな

イア　氣が狂うたか、女房、宅へ往けよ、命令けたぞよ

エミ　申し方々、どうぞ御聞き下されませ、良人の命令には從ふ筈でムりますが、只今ばかりはなりませぬ、コレ、イアゴー殿、妾は宅へは歸りませぬぞへ、大方一生歸りますまい

オセ　おゝ〳〵

と臥床の上に倒れかゝる

エミ　實に佞臣うて吼えるが相應ぢや、世にあのやうにお優しい、節しい女子がムりませうや、それを殺したオセロ殿

オセ　（起上り）いや〳〵彼女は不貞腐れ――おゝ貴殿は（グラチアノに向ひ）叔父御でムったか、姪御のデスデモナは、たった今此某が兩腕の爲めに息の根を止められて、それそこに死んでムる、いかばかりか此所業は、恐ろしく酷たらしう見ゆるでムらう

グラ　憐むべし、デスデモナ、想へば汝の父親が歿りたりしは却て幸ひ、娘の緣組が死因となり、嘆きが高じて老躰の、脆くも玉の緒を絶たれたが、若し今迄生存へて、此有樣を見たならば、憤怒に驅られて罪を作り、よい死にやうはよもせまい

オセ　それは痛ましい事でムる、乍去イアゴーも承知の通り、デスデモナ

儀はカッシォと、幾數回不倫の獸行に及び、カッシォ自らも白狀致してムるが、何寄證據は、某が與へし大事の品をば、カッシォに贈りしをカッシォが所持致す事てムります、乃ち往昔某が父なる者より、母人に贈りましたる、いはれある手巾でムります

エミ　おゝ神もみそなはせ、そのやうな事てあったのかいなァ

イア　ヤイ、默り居らう

エミ　これが默って居られませうか、制へて制へて切れぬ、北山嵐の其樣に、縱横無盡に喋って退けう、よしや天も地も、鬼も人も、一緒になって此妾を罵らうと、喋りぬかいてなるものかいなァ

イア　ちとたしなんで、さゝ、さっさと家へ歸れ

エミ　いゝや歸りませぬ〳〵

グラ　ヤア女に刃を向るとは

エミ　おゝ阿呆らしいムール殿、今仰有った手巾こそ、偶然妾が拾うたを、イアゴーに渡したもの、と申すは前以て、あんな物を可笑しい程、執心らしう、盜んでたべと、度々の依頼がありし故

イア　えゝこゝな蓮葉女奴が

エミ　それを夫人がカッシォに、與へたなどゝは飛んでもない、妾が拾うてイアゴーに渡したのでムりますぞへ

イア　ヤイ賣女怪しからぬ事を

エミ　申し方々、神かけて虛言ではムりませぬぞへ、おゝ慘たらしい、うつそり者の大將殿、此の樣な鈍物には、あの樣なよい夫人も無益な事

イア、エミを刺さむとする

オセ　さては云はうやうなき大悪人、あゝ、天非時の霹靂を、降して此奴を、懲らすの術はあらざるか、おのれっ

とオセロ、イアゴーに走りかゝる、イア、エミを刺して逃れ去る。

グラ　其女子は倒れたな、女房を殺した不屈奴

エミ　仰の通りでムります、おゝどうぞ妾の屍骸を夫人の御側へお寄せ下さりませ

グラ　女房を殺して逃げ失せ居ったか

モン　げに稀なる大悪人、オセロ殿の手の中より、取上げた此刃、之を携へて、貴殿は扉の外を御守り下され、たとひ殺すとも逃がさぬやうに、某はこれより直ちに彼の大悪人を追跡致さむ。

とモンタノ、グラチアノ退場

オセ　昨日の勇氣も何處へやら、今日は如何なる二才にも、我が腰の物を取上げらるゝあぢきなさ、さはいへ我が名譽といへる物の、地に落ち果てた此境界、何事も悔みは致さぬ、成行に任せるばかり

エミ　これ申し夫人、想へば先刻の御唱歌は虫の知らせ、お聞えなされますか、夫人、あの鶴といふ鳥は、諦ひながら死にやるとか、妾もその摸擬を致しませう（と諦ひ初む）

柳、々、柳よ歌へ

情知らずのムール殿、夫人は清淨無垢、それで貴郎を慕うてぢや、かう申すはみんな眞實、眞實を申す此身の未來は天國かや、此樣に思ふまゝを語らひながら、これて妾は死にまする

と息絶ゆる

オセ　おゝ此室にも一腰、太刀を置いた覺えがある、イスパニアの名ある鍛冶が、氷の如き小川の水で、鍛へ上げたる業物が、おゝこれこゝに――

――いで叔父の君、某はこゝを立出まするぞ

グラ　（奥にて）左樣な事を致さば命はないぞ、身に寸鐵を帶びざる汝が、何條拙者に敵すべき

オセ　然らば此方へ御入有て、御話し下され、さらずば寸鐵を帶びずとも、貴殿を襲ふ覺悟でムる

グラチアノ再登場

グラ　何事ぢや

オセ　御覽あれ、某は一刀を携へまする、此樣な業物は何處の勇士の腰の上にも、見らるゝ事ではムりませぬ、想へば此痩腕、此一刀、これさへあれば、何の貴殿風情の二十三十、推退け、はね退け、通り過ぎるに、手もない事もムったが、おゝそれも甲斐なき高言、まゝならぬは人の運命、今は何事も昔の夢、太刀は佩くとも、御心配には及び申さぬ、今ぞ某が浮世の旅の行留り、浪路の果は是てムる、ハテ後退なさるには及ばぬ事、それは無益の御心配、誰にてもあれ、此胸をたった一衝き、それでオセロは直ぐだち〳〵――さるにても、此オセロが行き處は、おゝ不運薄命のデスデモナ、白布を欺く其顏色、再び彼の世で、神の法庭に落合ふ時、左樣な姿を見せられたら、我が魂は忽ちに天上より轉び落ち、惡魔の餌食となり果てう、して又此冷たさは、其許が凛烈な節操同然――おゝ憎むべき大惡人――おゝ汝惡魔、此から〳〵しい天女の前より、我を奈落へ追墮し、旋風渦中の塵と卷き、沸騰つ硫黄の中にあぶり、火の海

の底の狹間に棄てもせよ、おゝデスデモナ、デスデモナ、早や汝は亡人の數に入りつるか

ロドビゴー、モシタノ、カッシ、オ（輪に昇かれて）及び役人共イアゴーを捕へて引立て登場

ロド　あの短慮一徹の不幸者は何處に居るぞ

オセ　それはもとオセロと申せし男にて、これ茲に居りまする

ロド　あの蝮め（イア）をこゝへ引出せ

オセ　おゝ此奴の足には歸がない、鬼は歸があると聞いたは、架空か、とも かくも摩性の者なら、殺しても死なぬ筈

ロド　それ物共、其刃を奪ひ取れ　とイアゴーに斬付ける

イア　傷は負うたれど、命に別條はムりませぬ

オセ　それこそ却て拙者が本懷、汝は生かして置きたい奴、死ぬるは幸福と知らざるか

ロド　あのやうに、よい仁であったオセロ殿、惡人の罠に罹って此始末、ハテ何と申したら宜しからう

イア　何とでもそれは御隨意、乍去某は只管名譽を重んずるの心より、斯樣な事も致した次第、さら〳〵憎惡の念故ではムりませねば、名を重んずる惡黨とも仰せ下さらば、滿足にムりまする

ロド　これなるイアゴーも、半ば白狀致したが、カッシオの殺害は、貴殿と彼との其中に

オセ　仰の通りてムります

カッ　懷かしの大將殿、某に於ては、御憤怒を蒙るべき、覺えは毛頭ムりませなんだ

オセ　それは最早疑ひ申さぬ、幾重にも御容赦あれ、此上の御願には、彼の鬼奴が何故あって、拙者をかゝる罠にかけ、現世當來の苦患を見せむとはなしたるか、熟と糺明致して下され

イア　いや何事も御尋ねあるな、御存知ある丈は御存知ぢや、今より某は一言も口はきゝませぬ

ロド　祈禱をも捧げぬ覺悟か

グラ　汝の口を開かする楔はあるぞよ

オセ　いかさまそれは、汝が最上の覺悟であらう（向てイアゴーに）

ロド　オセロ殿、恐らく貴殿は御存知あるまいが、云うて聞かさう、それで大方了解るでムらう、コレこゝに書面が一通ムる、是は殺されたロデリゴーの衣嚢の中にて發見しもの、又こゝにも後一通、此中の一方にカッシオの闇殺は、ロデリゴーに依て、執行せらるゝ趣が述べてムる

オセ　おゝ惡みても餘りある

カッ　鬼のやうな大惡人

ロド　さてこゝにも又一通、同じく彼が衣嚢の中にて得たるもの、此書面の趣は、ロデリゴーが不平たら〳〵、イアゴーを呼び迎へむと致せしもの、然るに未だ此書面を、發送するに及ばずして、イアゴーが參り合せ、用向は濟みしものと察せらるゝ

オセ　おゝ憎むべき下司下郎、さるにてもカッシオ殿、恐妻が有なりし彼の手巾が、如何にして御手には入りましたぞ

カッ　それは、某が居室にて拾ひました、彼自らもたった今白狀致してムりますが己の爲めにする目的ありて、わざと落とし置いたとの事でムりまする

オセ　想へば拙者は大痴漢

カッ　またロデリゴーが書面の中には、彼がイアゴーを責めたること、イアゴーこそ彼をして、いつぞやの警固の場に、喧嘩を某に買はしめし事、それ故某は、官職を奪はれしことが申してムります、然るに其ロデリゴーは只今息を吹返し、彼を傷けたるはイアゴーにて、彼をして此かる所爲をなさしめたるも、イアゴーなりと申しました

ロド　貴殿は是より我等彼方へ同道致さむ、貴殿が職權は取上げましたぞ、サイプラスの主權者は今よりカッシオ、イアゴーには成るべく長う酷たらしう、苦め得るの刑あらば、それをば彼に當ってムらう、貴殿が犯罪は、ヱニスの朝廷に具申致し、何分の指圖ある迄は、監禁の身と御覺悟あれ、さらば物共案内致せ

オセ　暫らく〳〵、一言申す事がムる、某が國家の爲め從來盡したる功勞は、方々の知らるゝ所なれば、それは今更申しませぬ、たゞ此の不幸なる某が行爲を、公文を以て御報告ある時は、何卒實際を御述べ下さりませ、惡意を以て事實を曲ぐるなどは、いはでもの事、何事をも包まず飾らず御陳べ下され、さて某は妻を愛するに實しからず、愛憐却て度を失し、容易く嫉妬は起さねど、惡人に計られて、心胸遂に攪亂し、彼の愚かなる蠻人が、我が部落にも換へ難き、寶玉を、我から抛つやうに、自ら愛妻を殺害し、泣いた例のない眼なれども、其悲故に、アラビヤの樹

木より樹脂の流るゝそのやうに、涙を注いて居りまするとこの市に於て、意地曲
記し下されい、其上で彼のシリアなる、アレッポーの市に於て、意地曲
悪き土耳其人が、エニス人を打擲し、其國家を罵詈せし時、某其土耳其
人めが、喉首を引捉へ、此樣に刺殺したと、何卒御報告下さりませ（アレッポ
の市にて、基督信者が土耳古人を打つことあれば、其地の法律として酷刑に處せられしとぞ、されば土耳古人を刺殺す如きは大罪オセロの如きに非ざれば能はず
と知るべし）

と自分の喉を刺貫く

ロド　おゝ無殘の最期を遂げられたなア
グラ　我等が語り合ひし事も水の泡
オセ　其許を殺す前にも接吻せしが、今とても

とデスデモナの上に倒れかゝりて

接吻しながら死ぬばかりぞや

と息絶ゆる

カッ　刄物は持たぬと思ひたりやこそ、さもなくば、氣丈者のオセロ殿、か
やうの事もあらうと思うたに

ロド　（イアゴーに向ひ）おゝ汝狗猥人の世の煩惱餓鬼、天地を呑む海よりも、獰猛
なる汝イアゴー、臥床の上の凄慘き、あの有樣を熟と見よ、是もみんな
汝が業、見るも眼の痛むばかり、物共早う取片付けよ——グラチアノ
殿、貴殿は此家を押收し、ムールの財産を相續なされい、デスデモナ殿
の血緣に依り、是は貴殿の權利でムる——又此島の總督殿には、凶淡
イアゴーが所罰をなされませ、刑の選擇、時と處とは貴殿の隨意でム
る、たゞ存分になされませい——某はこれより出發、本國政府へ此慘

事を、泣く〳〵報道致すでムらう

と一同退場幕

オセロの悲劇 終

明治三十九年五月廿五日印刷
明治三十九年五月廿八日發行

オセロ
定價金八拾五錢

著作者　戸澤正保
　　淺野和三郎

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
大日本圖書株式會社
代表者　專務取締役　宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
大日本圖書株式會社支社

沙翁全集

發賣元

沙翁全集

文學士 淺野馮虛 戸澤姑射共譯

沙翁全集は抄掇に非ず 梗概に非ず 忠實と親切とを旨とした完全譯なり 文壇の至寶として永く後世に傳ふべきものは即是なり

全部三十七卷
毎卷菊判約四百頁
數ヶ月毎に一卷宛
刊行の豫定なり

總目次

既刊

▲第壹卷 ハムレット 姑射譯 定價金八拾五錢 郵稅拾錢
▲第貳卷 ロメオエンドジュリエット 姑射譯 定價金八拾錢 郵稅拾錢
▲第參卷 ヴェニスの商人 馮虛譯 定價金八拾錢 郵稅拾錢
▲第四卷 オセロ 姑射譯 定價金八拾五錢 郵稅拾錢

明治三十九年六月以後に於て發刊すべきもの左の如し

○ダイタス、アンドロニカス
○顯理六世上篇
○顯理六世中篇
○顯理六世下篇
○間違の喜劇
○ヴェロナの二貴人
○リチャルド三世
○夏の夜の夢
○リチャルド二世
○ジョン王
○悍婦ならし
○顯理四世上篇
○顯理四世下篇
○而白きウインザアの女房達
○から騷ぎ
○顯理五世
○御意のまゝ
○十二夜
○シーザー
○終よき皆よし
○しつぺい返し
○トロイラス、クレシダ
○リイア王
○マクベス
○アントニー、クレヨパトラ
○アゼンスのタイモン
○コリヲレーナス
○ペリクリイズ
○シムベリン
○あらし
○冬物語
○顯理八世

大日本圖書株式會社

大日本圖書株式會社出版圖書特約販賣所

北海道 小樽。豐間。白鳥。川南。池田。觀文舍。一二堂。山本。最上谷。村上。東京府 文林堂。水野。東京堂。六合館。丸善。仙鶴堂。中野。青野。中西屋。杉村。穴山。中央堂。松邑。森江。大倉。金刺。北隆館。三友。播磨屋。內田。東海堂。文會堂。藤山房。榮進館。良明堂。青年堂。柏屋。神奈川縣 弘集堂。田沼。丸屋。新潟縣 高桑。高橋。觀雅。野島書店。四村。中山。高松堂支店。北光社。松田。目黑。山本。柿村。富山縣 水野。いろは堂。盛化堂。尙古堂。群馬縣 煥乎堂。文江堂。淨觀堂。木田。千葉縣 多田屋。茨城縣 伊沼。明文堂。川又。大塚屋。寺田。南龍堂。高木。宮田。栃木縣 內山。永樂屋。平石。青木。三重縣 安屋。愛知縣 永東書店。川瀨。岐阜縣 吉見。谷崎屋。古澤。菅沼。大石。山梨縣 柳正堂。岐阜縣 郁文堂。長野縣 日新堂。水野堂。小林。朝陽館。四澤。盛文堂。丸山。宮城縣 薩崎。福島縣 虎屋。陽文堂。丁子屋。上野屋。岩手縣 文港堂。佐藤。近藤。築田。青森縣 浦山。今泉本店。今泉支店。伊吉。山形縣 盛文堂。日向。牧野。五十嵐。相原。秋田縣 晴堂。東海林。藤嶋。鮮進堂。富山縣 中田。野海堂。堂濟 柳田。京都府 若林。中井。河合。松田。村上。南波。大阪府 中村。岡島。金川。中川。柳原。小谷。松村。三木。梅原。吉岡。前川。丸善。田中。三宅。石田。北村。金尾。石井。本田。中井。竹內。兵庫縣 熊谷。石田。福浦。竹內。木村。藥師寺。長崎縣 虎興號。集英堂。奈良縣 木原。木原支店。高橋。和歌山縣 盛田。福井縣 品川。西村。石川縣 宇都宮。近田。古香堂。島取縣 德岡。今井。藤谷。島根縣 安達。大鷹。園山。川岡。板倉。岡山縣 武內。廣島縣 鈴木。兒玉。原田。山口縣 藤川。村田。白銀。小原。和歌山縣 宮井。愛媛縣 黑崎。香川縣 宮脇。簡井。入江。鈴友。愛媛縣 向井。土肥。山梨縣 澤本。福岡縣 石田。森岡。菊竹。梅沈。中國。佐野。大分縣 甲斐。野俠。佐賀縣 牧川。河內。熊本縣 長崎。宮崎縣 松井。津野。野崎。谷。鹿兒島縣 吉田。久永。沖繩縣 豐見城。有馬。

明治三十七年五月四日印刷納本

定期刊行

帝國文學 毎月十日發行 定價金拾五錢 郵税壹錢

丁酉倫理會 倫理講演集 毎月末日發行 定價金拾貳錢 郵税壹錢

教育研究 毎月一日發行 定價金貳拾錢 郵税壹錢五厘

好評五版

文學士 片山正雄君

男女と天才

美裝一册 定價六拾五錢 郵税拾錢

帝國文學會編纂

帝國文學 百號紀念 全一册 定價金參拾錢 郵税金貳錢五厘

明治三十七年 新年號 全一册 定價金參拾五錢 郵税金貳錢五厘

臨時第一 懸賞小説と講演 全一册 定價金貳拾五錢 郵税金貳

文豪小泉八雲 全一册 定價金貳拾五錢 郵税金貳

帝國文學 創刊十週年紀念號 全一册 定價金拾五錢 郵税金壹錢五厘

臨時第二 シルレル紀念號 全一册 定價金四拾五錢 郵税金參

東京 大日本圖書株式會社 大阪

78
69

78
69